

モードの意味創出作用論から

自己-他者の隠れ蓑構造論へ I

関根 靖光

(平成9年10月2日受理)

A Study on the Signification of Mode Language and the Effect on the Human Relationship I

Yasumitsu SEKINE

(Received on October 2, 1997)

序

ドイツの女性雑誌 'freundin' の97年4月号には、盛夏のトレンドの特集が組まれている。コンセプトは、「さまざまな水色 (Aqua-Farben)」「ランジェリー・ルック (Lingerie Look)」「光沢と魔力 (Granz und Glamour)」「人目を引くカット (Blickfang Ausschnitt)」「マドラス・チェック (Madras-Karos)」の5つで、その各々には数葉のカラー写真が配されている。ユカタン半島の海辺のリゾート地カンクン。その群青の海、照り輝く砂、淡く遠い空、くすんだ小屋、ホテル・リッツの微風の回廊を背景に、軽やかに鮮やかに衣装を身につけたモデル達の、ある時は開放的、ある時は物憂げ、またある時は挑発的に大胆な表情やポーズ。それら視覚的な魅力に満ちたページに先立って、扉に当たる冒頭のページには「モードは誘い! (Mode ist verführung!)」の文が謎めいた鍵穴のように印されている。そして鍵穴に鍵を差し込み、扉を一枚めくると、そこは、眩いばかりのカンクンの夏、という趣向なのである。

しかし、そもそもモードは、読者をどこに誘おうとしているのだろうか。また、読者はなぜ誘われるのか、誘われることは読者にとってどういう意義を持つのだろうか。

拙稿は、上記の問に答える試みの一つであるがその射程は、自己-他者構造論にまで及ぶことになろう。しかし、モードが読者をどのようにして誘うのか、その誘いの戦略を言語学的な意味創出作用を手掛かりに闡明する。

I モードの意味創出作用論

§1 モード記事の具体例

以下の考察の手掛かりとして、先に触れた雑誌 'freundin' 97年4月号の盛夏モード特集から5つの記事(ドイツ語原文+拙訳)を選んで紹介する。

① 「種々の水色」コンセプトの総括文

“Mint, Türkis, Marine: Traumhaft schöne Blau und Grüntöne erinnern an wolkenlosen Himmel, endlos weites Meer—und wecken Ferienstimmung...”(「ミント・ブルー、トルコ・グリーン、マリーン・ブルー: 夢のような美しい青や緑の色調は、雲一つない青空、無限に広い海を思いださせます——そして休暇気分を呼び起こすのです」)

② 同上コンセプトの一例

“Das Raffinierte an diesem marmorierten Netzshirt ist sein 50cm langer Rollkragen, den man als Carmen-Dekolleté verführerisch über eine Schulter ziehen kann. Ein glitzerndes Bikinitop macht das Hemdchen blickdicht.”(「この(写真の)大理石模様の網シャツの洗練された点は、(それに付いている)長さ50センチの巻きカラーです。それを、カルメン・デコルテとして、片肩に魅力的にはおることが出来ます。(その下の)光沢あるビキニトップはシャツ(の胸の部分)を不透視にします」)

③ 「人目を引くカット」コンセプトの総括記事

“Ganz schön schräg: Raffiniert geschlitzte Kleider, schulterfreie Tops und asymmetri-

sche Dekolletés signalisieren, daß dieser Sommer superweiblich wird!”（「全く美しく斜めに（カット）：洗練された（斜めの）切り目を持つ服、片肩の開いたトップ、そして非対称的なデコルテは、この夏が（あなたにとって）最高に女性らしくなる徴です」）

④ 同上コンセプトの一例

“Kurvenreiche Strecke! Bei diesem enganliegenden Schlauchkleid sieht man erst auf den zweiten Blick, daß es ein Einteiler ist. Eine Schulter und das halbe Rückendekolleté bleiben frei, an der Hüfte guckt auch noch ein Stück Haut heraus. Aus fließender Kunstfaser”（「曲線豊かな（シルエットの）線！この体にぴったりしたチューブラードレスは（ウエストに深い切り目が入っているため第一印象はツーピースに見えますが）再度見なおすと初めてワンピースであることが分かります。片肩とデコルテの背中半分が開いており、腰のところで、肌の一部が覗いています。」）

⑤ 「ランジェリー룩」コンセプトの総括文

“Viel Haut kann man im Sommer in verspielten Trägerkleidern zeigen, die mit zarten Stoffen oder Spitze oft ein romantisches Doppelleben führen”（「夏、遊び感覚で着る吊り紐ワンピースで、肌を多く露出できますが、それ（を身につけた人）は、柔らかな素材やレースで出来ていけば、ロマンティックな2重生活を送ります」）

これら個々の文章の「誘惑的な意味作用」構造を解析する前段階として、ロラン・バルトの著作‘SYSTEME DE LA MODE’ 1967（佐藤信夫訳、「モードの体系」、みすず書房、1972、以下「モード体系」と略す）における「意味作用の母型」「類の一覧表」「変異項の一覧表」を略述しておこう。

§ 2 モードの言語体系

「モード体系」におけるロラン・バルトの関心は、モード雑誌の文章を手掛かりに、モードの言語体系を解明することにある。彼が研究資料として利用したモード雑誌は、1958年6月から翌年6月までの1年間に及ぶ、フランスを代表する2誌‘Elle’ ‘Jardin des Modes’

で、その他‘Vogue’ ‘l’Écho de la Mode’も参考にしている。

彼の研究方法は、それらの雑誌のモード記事を収拾し、ソシール言語学から借用した分析原則をそれらに適用してモードの言語体系を漸次明らかにするという点にあったと言ってよいだろう。ソシール言語学的な分析原則とは、私見では大要、言語体系に関する次のような仮設に基づいた分析手法の謂である。

- ① 体系を構成している語の集合がある
- ② その体系の中の語の位置は、他のすべての語との差異によって決定される
- ③ 差異には少なくとも2種ある。その一は、相互に交換可能で同じ価値次元を構成しうる場合で、それらの実現は相互に両立不可能（仮に交換可能・両立不可能的差異と呼ぶ）。

他は、相互に交換不可能で、所属する価値次元を異にする場合で、他の価値次元に属するものとの間には、実現において両立可能である（仮に交換不可能・両立可能的差異と呼ぶ）

- ④ その体系のすべての語は、上記の2種の差異性によって排他的にグループ化されたり、機能的に関係づけられ、体系的構造を形成する

さて、これらの原理に基づく分析手法の原則は次のようにならざるを得ない。

- ① 或る言語体系があると仮定して、その言語に属すると見做される文や語を収集する
- ② 文の中の或る語を他の語に入れ換え、それらが交換可能的・両立不可能的差異性を有するの、交換不可能的・両立可能的差異性を有するか、チェックする。

それをすべての語について敢行する。

- ③ そのようにして、最小の単位からより大きいものまで、価値次元を同じくしたり、異なったりする語のグループ化が形成されていく。

- ④ それらグループが、どのように機能的に関係し合っ
て、推定される言語体系構造を形成するのかを確定
していく

ロラン・バルトは正に、彼が収集した膨大なモード記事の各文章、各語に対して、上記の分析原則を適用して、モードの言語体系を確定せんとした、と言える。即ち、

- ① モード用語には或る体系性があると仮定し、フランスのモード雑誌から記事や文章、語をできるだけ

多く、整然と収集する

- ② モード文の中のすべての用語に対して、他の用語を入れ換えてみて(=入れ替えテスト)それらが果たして交換可能か否か、両立可能か否かをチェックする
- ③ このようにして、小別から大別に至るまで語のグループが形成され、それらの価値次元の差異や関係性が明らかにされる
- ④ かくして、モードの言語体系の提示の試みがなされる、それが即ち、彼の著作「モード体系」

§ 3 分析原則の具体的な適用例

例えば、収集された中に次のような文章があったとする。

“Une robe en coton à damiers rouges et blancs”(「赤と白の市松模様の木綿のドレス」)

下線部の語に対して、交換・両立可能性を調べる入れ替えテストを施してみよう。

- (1) ‘robe’ は、この文章全体の陳述が目指す対象であり、後に続く語群がそこへと関係づけられる基体なので、この文脈では入れ替え不能とみなそう
- (2) ‘coton’ の代わりに ‘soie(絹)’ ‘laine(ウール)’ ‘lin(亜麻)’ などの語を入れ替えてみるとそれらが交換可能だが同じ対象(robe)の同じ部分に関しては同時には両立不可能であることが分かる。これらは「材料(Matriau)」という同じ類に属する材料語を構成することが分かる
- (3) ‘damiers’ には ‘carreaux(チェック)’ ‘fleuri(花模様)’ ‘géométrique(幾何学模様)’ ‘rayé(縞模様)’ 等の語が交換的・非両立的に入れ替え可能で「モチーフ(Motif)」という同一類に属する柄・模様語であることが分かる
- (4) ‘rouge’ ‘blanc’ は同様に、他のすべての色の名称と共に、色(Couleur)という同一類に属することが分かる

もう一つ例を上げよう。

“Une robe - blouse en coton, voici l’été(木綿のブラウス・ドレス,ここに夏があります)”

- (1) この文中の‘robe-blouse’には、今年の夏の流行を象徴する衣服語なら何であれ入れ替え可能であるが、狭く捉えれば、robeと称される或る衣服型に属する語、例えば‘robe-blazer(ブレザス・ドレス)’

‘robe - chemisier(シャツ・ドレス)’ などが入れ替え可能である

- (2) ところで ‘Une robe - blouse en coton’ = 「木綿のブラウス・ドレス」という語群は、直接、フォト・イメージとしてのそのドレス、間接的には工芸的なそのドレスの実体をデノート(表示)しているが、全体としては、その服装が「夏向きであること」、つまり端的にl’été「夏」をコノート(伴示)している。正に、入れ替え可能な他の多くの選択肢を押し退けて「今夏のモードの目玉」の一つとして採択された。そういう意味で ‘l’été’ は、この陳述の意味作用が最後にそこに向かい、そこで意味を充実させる最終的と言えよう。従ってその語が通常の語彙の上では、‘le printemps(春)’ ‘l’automne(秋)’ などと入れ替え可能であっても、この文脈のモード言語的機能の点では入れ替え不能ととるべきである。

§ 4 モード言語に見られる大区分、中区分、小区分

ロラン・バルトが分析原則を駆使して、上記のような解析プロセスを経ながら到達したモード言語体系の分類構造は、ほぼ次のように素描できるだろう。

まず、2つの語群に大別される。

- A 衣服に関するすべての語群：モードの陳述とは結局は衣服についての陳述なのであるから最も基礎的である
- B 衣服の陳述が読者をそこへと誘う約束の世界：モードの陳述がその為になされるその目的

各々が更に次のように中区分される。

- A-1 衣服の素材的部分に関わる語群：アンサンブル、ピース、ピースの付属部分、ディテール、アクセサリーなど衣服に関わる語群のすべての「種と類」
- A-2 それら素材部分における様々な性質や状態の変異を表す ‘Variant(変異項)’ と呼ばれる語群のすべて：形態、しなやかさ、大きさ、重さ etc.

このA-1とA-2の組み合わせ陳述で、フォト・イメージ衣服の全体が表現される。例：「赤と白の市松模様の木綿のドレス」「木綿のブラウス・ドレス」

B群は次のように更に区分される。

- B-1 衣服の陳述の、陰に陽に意図された第一の約

束：その服を購入して身につければ、「流行性 (à la mode)」が確実に約束される。不幸にして身につけられなかったら、「流行外れ (démodé)」になるかも。モード雑誌の存在理由が、読者に、どんな装いがこの季節この年の流行で、何が流行外であるかの断定的情報を伝えることであるなら、この単純なあれかーこれかだけの2語で構成されているB-1は代表的と言える。

B-2 陳述が読者を誘い約束する世界や性格の様々な魅力的様相：「この(素晴らしい)夏」「超ロマンティック」「休暇気分」「バリバリに活動的」「聡明な女子大生風」「美しいテニス」等々このB-2群についてバルトは、それが無限で不定なため、A群でのような体系的分類を放棄している。しかし、恐らく丁寧に見ていけば、そこに何かしらの分類構造が発見されるだろう。

ところで、A-1は更に以下のように細部に分類される。

A-1-1 アクセサリー 2 留め具、結び 3 ストッキング 4 バスク(ウエストラインから下のフレアー部分) 5 ブラウス 6 へり 7 プレスレット 8 吊り紐 9 キャロット(球帽の丸い部分) 10 ケープ 11 頭巾付きマント 12 ベルト 13 ショール 14 靴 15 クリップ 16 被り物、帽子 17 えり 18 首飾り 19 わき 20 色 21 縫い 22 ネクタイ 23 ディテール 24 前身ごろ 25 背中 26 裏 27 スカーフ 28 袖つけ 29 えり空き 30 アンサンブル 31 肩 32 花 33 手袋 34 ジレ(チョッキ類) 35 ヒップ 36 スカート 37 ペティコート 38 ライン 39 そで 40 コート 41 材料 42 モチーフ(柄・模様) 43 飾り 44 パン(すその垂れ下り部分) 45 パンタロン・スラックス 46 パット(飾り用の細いバンド) 47 ひだ・プリーツ 48 ポケット 49 ポシェット(小袋;佐藤訳の飾りハンカチーフは古い) 50 そで口・カフス 51 フラップ(雨蓋) 52 ドレス 53 バッグ 54 スタイル 55 スウェーター 56 ウェスト 57 エプロン 58 ヒール・かかと 59 ジェケット(ヴェスト) 60 ヴェール(帽子から垂らす)

以上、A-1は明らかに衣服の物質的側面に対応するが、バルトはあくまで、工芸的、解剖学的用語としてよりは、流行・非流行の発生する衣服関連部分を表す語群

として、モード言語の立場から分類しているのである。

他方A-2は、その衣服の或る部分に、何故、どういう仕方、流行・非流行が発生するのか、その発生様相の様々な変異が分類されていると言える。いわば偽物質的な衣服部分に、ふわっとかかった透明な観念的ヴェールのようなもので、その部分に魅力的な陰影を与え、魔術のようにア・ラ・モードの雰囲気立ち昇らせる、というわけである。バルトによって変異項と呼ばれる語群は以下のように細分される。

A-2-1 同一性[種の断定、存在の断定、人工性、マーク] 2 外形性[形態、合い加減、動き] 3 物質性[重さ、しなやかさ、凹凸性、透明性] 4 尺度[長さ、幅、体積、大きさ] 5 連続性[分割性、取り外し可能性、閉じ方、留め方、折り曲げ方] 6 位置[水平位置、垂直位置、前後位置、方向] 7 配分[数、一多性、対称性] 8 連結[現われ方、組合せ、強調的調整] 9 程度(変異項の変異項)

さて、A-1-1以下の各項目、A-2-1以下の各項目とも、更に最後の単位へと細分化される。その一部のみ紹介しよう。

A-1-5 ブラウス:ブラウス, エプロン・ブラウス, スウェーター・ブラウス, チュニック・ブラウス, ブルゼット, ブラシエール, カフタン, カズズー, キャラコ, カザック, カズラ, シャツブラウス, コルサージュ・ブラウス, ジャンパー, セラーブラウス, ポロシャツ, チュニック

A-2-2の形態:直線的な/曲線的な, 四角形の/すらりとした/斜めにカットされた/丸い, フレアーで広がった/卵形の, 四角形の/箱形の/球形の/鐘形の

§5 モード言語における陳述形成:原型としてのソーシャル言語論

モードの陳述を構成する語は上記のどこかの語群に所属する、というのがバルトの確信である。それが果たして真か否か、つまり彼の分類が体系性の基準を満たすかどうかは、本稿では不問に付し、考察を先に進める。陳述の中における語相互の機能的働き、更には、語の統合によって構成された陳述全体は、読者に対してどのような作用を及ぼしているのだろうか。

まず、バルトが援用しているソーシャル言語学のシニフィアン(種々の訳あり。ここでは意味創出と訳す)とシニフィエ(ここでは創出意味と訳す)の考え方を復習

する必要がある。この理解の為に、次のようなイメージを用いても大きな誤解にはなるまい。

いま、未分化・未定の言語の原空間があるとする。他方、言語原空間に接して、やはり未分化・未定の、世界事象の原空間があるとしよう。ところで或る語が誕生するとは、先の言語空間からその語を創出するという事である。その語は、言語空間の他の残余の空白とは異なるゲシュタルトとして際立たせられる。このようにして語が次々に、他の各々の語とは異なるゲシュタルトとして誕生していく。ところで、言語原空間におけるこの差異化による言語創出活動が、原理的に、世界事象の原空間に初めて意味なるものを発生させるものであると仮定しよう。そうであるならば、言語原空間の相互に差異ある語群の創出は、世界事象の原空間に初めて、それに対応する差異ある意味群を齎らしたことになる。このようにして意味ある世界は、言語創出活動なしには発生しなかったし、また、そのような言語を使用し続けることによって、意味分節化された世界は、そのように存続しうるわけである。

例えば、或る国の動物に関する、相互に差異のある言語群は、世界に初めて相互に区別された動物に関する意味分節を導入したと言える。端的に言えば、その動物言語体系を駆使する人々は、そのように分節化された動物世界をリアルに生きているということである。また、他の異なる国では異なる動物言語体系を創出したであろう。そこではその言語体系と共に、先の場合とは異なる意味世界をリアルに生きていることだろう。その両言語体系とも、動物学的な動物用語体系とは区別されるのである。

ところで上述の言語観から、語（一般的に記号；シーニュ）のシニフィアン（意味創出）とシニフィエ（創出意味）が理解できる。つまり、語は言語原空間における他の語との相互差異化作用によって、世界事象の原空間に、他の意味とは相互に異なる意味を創出しているのであるが、語の言語的な相互差異化作用の側面を指してソシュールはその語（シーニュ；記号）のシニフィアン（意味創出）と呼び、それと表裏一体の、世界において相互差異的に創出された意味の方をシニフィエ（創出意味）と名付けている、と解釈できるのである。換言すれば、どの語もその両面を具備している。

以上を踏まえて、バルトに戻ろう。

先の言語の原空間と世界事象の原空間を、各々モードの言語原空間、モード世界の原空間に代えよ。正に、バ

ルトのモード言語体系の考え方に移行する。モード言語における、「スカート」や「ブラウス」や「えり」といった相互に差異ある衣服関連語群の創出は、未分化で未定の連続的なモード世界に初めて、スカート、ブラウス、えりといった相互に差異のある、非連続的に分節化された意味群を導入したと解釈できるわけである。そして、その「スカート」などの各語のシニフィアン（意味創出）とシニフィエ（創出意味）とは、その語が他の衣服言語との差異によって、モード原空間に、例えばスカートという、他の意味とは異なる特定の意味を創出する、その作用と意味の両面を指すことは言うまでもない。

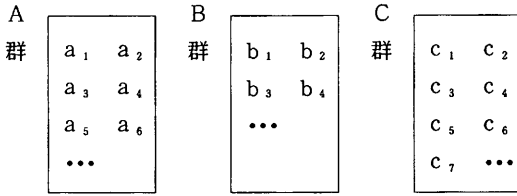
以上、主に単一の語の創出と意味形成に関するものであったが、複数の語が連結して文を構成し全体として意味作用を有するという、より高次の事態はどう説明できるだろうか。先達のソシュールから見ていこう。

ソシュールは、語と語の関係として、連辞関係（rapport syntagmatique）と連合関係（rapport associatif）の2種を上げている。前者は端的に言えば、主語＋動詞＋目的語、などの線形的な統辞論的關係そのものと、その文脈関係における語同士の連結関係を指す。もちろん、この関係性にも差異化が働いている。主語と述語はその文脈位置や機能が異なるし、従って文の各位置を占める語同士も、そのような統辞論的差異を被っていることになる。他方、後者の連合関係とは、例えば、相互に差異的な名詞群が、名詞という同じ語類を連合的に形成するような事態。動物名が相互差異的でありながら、動物名という同じ類のグループを形成する、といった事態を指す。

この2種の関係性、差異性がクロスしながら、シニフィアン、シニフィエの輻湊した意義が以下のように産出されていく。つまり、語は、単に体系的な連合関係の点からだけでなく、文脈的な連辞関係の点からも、他の語と相互差異的に創出され、それと共に、世界事象の原空間に、連合、連辞の両関係から、他の意味と異なる意味が創出される。前者の言語的な相互差異化作用が、文形成の次元も含めた高次のシニフィアン、後者の世界における相互差異化された意味の方が高次のシニフィエ、と解すことができる。

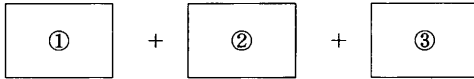
文の具体的産出の際の、その両者の関係性、差異性的自体は次のような統一イメージでモデル化できるだろう。

まず、連合的な関係および差異として、下図をイメージしよう。



A群, B群, C群の各々の語群は相互に異なると共に, 各語群に属する各語, 例えば a₁ a₂ a₃...は相互に異なる。

次に, 連辞的な関係と差異のイメージの下図。



①②③は, 統辞論的に相互に差異があると共に位置機能的に関連する。

さて例えばA群は, 統辞論的には①か③に位置可能で, ②には不可能。また位置によって意味に差異が生じるとする。B群は②にのみ可能で, C群は③にのみ可能としよう。

すると, ①→②→③と文を生成させる時, ①にはA群に属する語群が候補として群がり, ②にはB群が群がり, ③にはA群とC群の両群が群がるその中から, 例えば, ①にはA群内の他を排して a₃が, ②にはB群内の他を排して b₁が, ③にはA, C両群内の他を排して c₆が選択され, 「a₃+b₁+c₆」という文が生成することになる。しかし, a₃, b₁, c₆の各々のまわりには陰に陽にその位置から排斥された他の語群があたかも亡霊のように付きまとい, 選ばれた各語の意味と構成された文全体の意味を, それらとの差異性および関係性から暗に支えているのである。もちろんこの統一イメージを逆転して, まず選ばれたいくつかの語があり, そこに, 適応可能な連辞の関係型の候補が蝟集し, 或る型が選出され, 実際の文が生成されるとしてもよい。生成の実態は, その両方面の揺動的引き付けであろう。

以上, ソシユール言語論の考察であったが, バルトのモード言語の文形成, モードの陳述構成はソシユールの原型と比べ, どのような異同があるだろうか。

節を改めて検討しよう。

§ 6 バルトのモード言語論におけるシニフィアン(意味創出の)母型

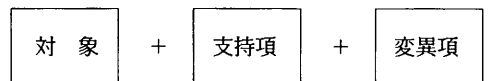
当然, バルトが収集したモードの陳述はどれも通常の

文章と同様, フランス語の統辞法に適った語の連辞関係を有している。例えば § 3 で取り上げた文: 'Une robe en coton à damiers rouges et blancs(赤と白の市松模様の木綿のドレス)' の構成は, 「不定冠詞+名詞+前置詞+名詞+前置詞+名詞+形容詞+接続詞+形容詞」となっているが, この語順の変更や使用されている語同士の入れ替えは大きく制限されている。語同士, § 2 で触れた交換不可能的・両立可能な仕方では相互に差異がある。他方, 'coton(木綿)' という語には, 'soie(絹)' 'laine(ウール)' 'lin(亜麻)' など他の材料語を入れ替えることができる。つまり, 相互に交換可能的・両立不可能である。'damiers(市松模様)' には 'carre-aux(チェック)' 'fleuri(花模様)' などの「モチーフ」語が, 'rouges et blancs(赤と白)' には他のあらゆる色彩語が入れ替え可能である。これら交換可能・両立不可能な語同士は, 一つのジャンルに属する連合関係を有していると言える。

このように見てくると, ソシユールと何ら相違ないように思われるが, モードの陳述を構成する語の連辞関係性に関しては, 通常の言述を支配する文法的関連とは異なる, 別個のより基底的コードを発見している。いわば, モードの陳述の表層に対して深層レベルでの連辞の関係性である。いや, その逆に, 言語的な深層構造に, 更にモードという特殊な部門固有の表層構造が付いたと見ることも可能であろう。いずれにせよ, モードの陳述には, 純粋な言語形式とは異質の連辞関係がある, というのである。ともかく, モードの関連語群はすべからず, この基底的な連辞関係の中に, ほぼ規則通りに置かれることになる。

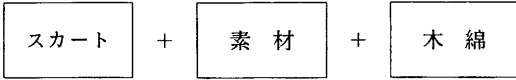
以下, バルトが母型と名付ける, モード固有の連辞関係の, 最も基本的形式を考察しよう。その基本的構成要素, それら要素の機能的関係性はどのようなものか, それらが統合されて形成される陳述文全体が, 如何に一つのシニフィアン(意味創出)機能を発揮するのか, 又そのシニフェエ(創出意味)は何であるか, 母型のシニフィアン機能の関数性とはどういう事態か。

- (1) モード固有の連辞関係の, 最も基本的形式(=母型)とその構成3要素は下図のように表現できる。



これを言葉で言い表せば「或る対象の, 或る支持項

に、或る変異が現存している」となる。例えば ‘une robe en coton’ の場合、解析すると、「スカート (=対象) の、素材 (=支持項) において、木綿 (=変異項) が現存している」と翻訳できよう。図で表すと、



注意すべきは、原文に ‘materiau’ (「素材」) という語がない点。バルトがこの母型に適合するよう分析の際に補ったわけである。このような縮約形や拡大形など種々の変形があるにせよ、基本型は3要素からのみ構成されている (いた筈である) というのがバルトの公理的確信なのである。原文に欠如や変形があったり複合的であるなら、分析者がそれを補い正しく解きほぐし、ともかく母型に還元せねばならない、ということである。

- (2) 3要素の機能的関係は次のように説明できる。「対象」というのが、モード世界を震撼させる「流行性」の震源地に当たる。「対象」に何か起きて、世界に最新の「流行性」や魅力的雰囲気吹き込まれ、読者に煌めく人生の一齣を約束するのである。その対象は、先のA-1群すべてに互る。スカートであったり、スラックスであったり、ブラウスであったり、数多の候補者がしのぎをけずる中、幸運にも「流行の神々 (ファッション業界?)」の白羽の矢が当たったものなら何でもOK。

ところで、何の変哲もない「対象」に流行の激震を与えるのが、その「対象」に生じた「変化」「変異」である。昨年の夏と異なり正に今年の夏、ブラウスに何か変化が生起する。それが流行にとって一大事となるのだ。この変異項の全体が、先のA-2群に該当する。かくして今夏ブラウスは、形態、長さ等々の点で昨年と比べ変貌し、読者の夏も魔術的に変容することになる (筈) だ。

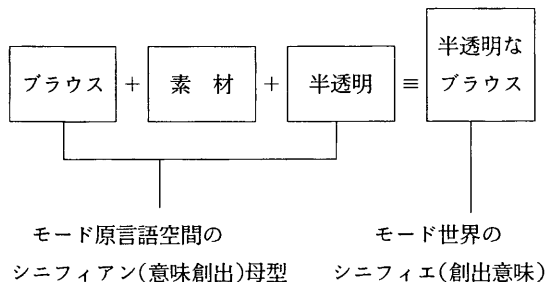
それでは「支持項」の役割は何であろう。バルトによると、変異項から発動される振動を最初に直接受容する場所は、「対象」ではなく断然「支持項」なのである。例えば、今夏ヒットのブラウス (=対象) は、「素材」という支持項において透明度が高い (=変異項) が故に、その変異を間接的に被って「ブラウスは半透明である」と見做される、というわけで

ある。変異項はまず支持項において意味変異を発生させ、それを介してその変異が対象にまで伝わり全体に浸透するのである。

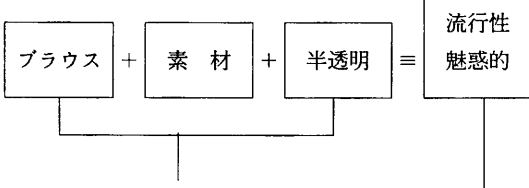
- (3) ところで、変異項から由来し支持項を通ってお目当ての対象へと機能的に伝播する変異の意味は、それら3要素を統合して、「素材が半透明なブラウス」という意味統一体を構成する。この統一体は、「素材が不透明なブラウス」「素材がほとんど透明に近いブラウス」など他の可能な選択肢を排して、それらとの差異において自らの特異な意味を主張していると言える。つまりこの統一体も、モードの言語世界において、他の可能性との相互差異性を創出しながら (シニフィアン)、モードの原空間に対応する衣服意味 (シニフィエ) を創出しているのである。
- (4) しかしバルトはその統一体のシニフィカシオン機能 (意味創出作用) の真骨頂を、単なる「素材が半透明なブラウス」という意味統一体の切り取りを遙か越えたところに置く。陳述「半透明なブラウス」は、結局は、それを身につけることによって読者に齎される筈の絶対的「流行性」や「世界や生活や性格の魅力的変容」を、断言的に、確約的に読者に示すというシニフィカシオン (意味創出機能) を有するのである。従って、その意味創出作用のシニフィエ (創出意味) は、「流行性」や「世界の変貌」ということになろう。いわば、モード言語原空間に半身浸かっている「半透明なブラウス」というシニフィアンは、そのシニフィカシオン機能によって、世界における「流行性」や「種々の魅力」というシニフィエへ読者を誘導する。

通常の言語的なシニフィカシオンとの相違を図示しよう。シニフィカシオンを記号≡で表現する。

[通常の言語的シニフィカシオン]



[モード言語固有のシニフィカシオン]



モード原言語空間のシニフィアン(意味創出)母型 リアル世界のシニフィエ(創出意味)

(5) ところで、衣服の変異によってリアル世界に引き起こされる「流行性」や「世界や人の魅力性」が、衣服の変異を言い表わすシニフィアンに対するシニフィエと言ったが、通常は、「流行性」や「種々の魅力」を表現する語や言辞のシニフィエの筈である。ここに2つの領域の意味創出作用の交錯が見られる。このような意味の交錯をレトリック的と呼ぶならば、モード雑誌の陳述はすべからくレトリック的という刻印を押すことができるだろう。なお、バルトが雑誌の中に見いだした「流行性」や「魅力」に関する語群は、§4で紹介した、B-1とB-2に当たる。

§7 バルトのシニフィアン母型の適用例

バルトによる母型分析の例をいくつか上げてみよう。

① 'un chandail à col fermé(est) habille (襟の閉じたスウェーターはドレッシーです)'

↓
[un chandail]+[col]+[fermé]≡[habille]
(対象=スウェーター)+(支持項=えり)+(変異項=閉じた)≡(ドレッシー)

② 'un sweater à encolure horizontale(水平な襟開きのスウェーター)'

↓
[sweater]+[encolure]+[horizontale]≡[(Mode)]
(対象=スウェーター)+(支持項=襟開き)+(変異項=水平の)≡(流行)

注意: 原文には「流行」などのシニフィエの言及がないが、その隠れたシニフィエを補った

③ 'Une blouse ample donnera à votre jupe un air romantique(ゆったりとしたブラウスはあなたのスカートに ロマンティックな様子を与えるでしょう)'

↓ 上記の文の変容
'Jupe avec une blouse ample donnera vous

un air romantique'
↓
[Jupe]+[blouse]+[ample]≡[romantique]
(対象=スカート)+(支持項=ブラウス)+(変異項=ゆったりした)≡(ロマンティック)

④ 母型が複合している文の場合

'cardigan sport ou habillé selon que son col est ouvert ou fermé (襟が開いているか閉じているかによって、スポーティだったりドレッシーだったりするカーディガン)'

↓ 上記の文の変容
'cardigan avec col ouvert (est) sport ou cardigan avec col fermé (est) habillé'

↓
[cardigan]+[col]+[ouvert]≡[sport]
(対象=カーディガン)+(支持項=襟)+(変異項=開いた)≡(スポーティ)
+
[cardigan]+[col]+[fermé]≡[habillé]
(対象=カーディガン)+(支持項=襟)+(変異項=閉じた)≡(ドレッシー)

以上は比較的単純であったが、母型変形的な文章の場合はどうなるだろうか。

⑤ 対象と支持項が省略されているケース

'La Mode est au bleu cette année(今年、モードは青です)'
↓
[bleu]≡[la Mode cette année]
↓ 省略部分を補う
[(robe?)]+[(couleur)]+[bleu]≡[la Mode cette année]

(対象=ドレス)+(支持項=色)+(変異項=青)≡(今年のモード)

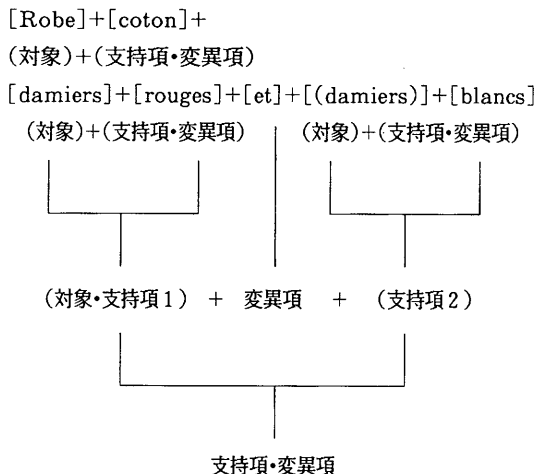
⑥ 変異項が2以上あるケース

'La vraie tunique chinoise et fendue(スリットの入った、本当のチャイニーズチュニック)'
↓
[vraie]+[tunique]+[chinoise]+[fendue]
≡[Mode]
(変異項1=本当の)+(対象・支持=チュニック)+(変異項2=中国の)+(変異項3=スリット)≡(モード)

⑦ 母型の重層構造：下記の例は3層構造

'Robe en coton à damiers rouges et (à damiers) blancs(赤と白の市松模様の木綿のドレス)'

途中省略



§ 8 バルトのシニフィアン母型分析の問題点

以下、バルトの問題点を箇条書きして見よう。

- ① 対象、支持項、変異項の区別は基本的に機能的な観点からなされている。変異項が意味差異の発生源であり、その変異の直接の受容地点が支持項であり、それを介して対象は全体にその変異を被ることになる、というわけである。しかし、機能の点から、何故直接に、変異項→対象であってはならないか。また陳述が変異項+衣服語の場合、バルトの考え方では、その衣服語は機能的に支持項と対象の融合されたものと捉えるしかなく、実際、融合の理由を説明するのに彼は多くの文を費やしているが、精細な分析の労苦は認めるにしても無理な辻褃合わせも散見でき、果たしてそれ程までして3要素体制を維持する必要があるか。
- ② また、3要素の相違を、対象や支持項は具体的に物質的な衣服そのものに関わるので物質的、変異項はそれらとは根本的に異なり非物質的と主張しているが、この3要素とも実際の服装について何かを意味する語であって、物質としての布地やえりそのものではないのであるから、すべて非物質的である。もし対象や支持項になりうる語「スカート」が物質

的ならば、「種の断定」という変異項も物質的であると見做して何故いけないか。

- ③ むしろ、対象も支持項も変異項も、それ自身の特性としては同じく非物質的であり、ただ相互の機能的関係において、区別が出てくるのではないか。しかも必ずしも3要素でなくてはならない、ということもなく。
- ④ 従って、母型の考え方をより可塑的に捉えれば、種々の変形タイプも必ずしも変形ということではなくなるのではないか。
- ⑤ いくつかの小さな母型が入れ子式になって、最終的に一の対象を機能的に指示するような構造があり、確かにバルトのように、それを重層的に捉え、下層の小母型などが上層では対象や支持項の機能をし、大母型を形成すると分析できるが、陳述が線形的統一性を有し陳述された服装も「見え」において統一されている点を考慮して、重層構造もバルト流に建築的にでなく、多重機能を内を含む線形構造として分析し、且つ表現できないか。つまり、種々の変形も重層構造もその型の中に吸収できる、懐の深い母型モデルを新たに考案すべきでないか。バルトの晦渋な分析の多くはそれによって簡素化され、多くの問題点も解消し、より実用的にもなるのではないか。

§ 9 シニフィカシオン(意味創出作用)の関数モデル

以上の問題は、バルト自身が母型構想の模範とし目標とした関数モデルで基本的に解消される。関数は、定義域とされる集合内の変項(或いは変数)のセットを、値域とされる集合内の或る項(値)へ写像させる機能である。変項をx、関数機能をF、値をrとすると表現は次のようになる。

$$F(x_1, x_2, x_3, \dots) = r$$

いま、モード陳述のシニフィカシオン機能を関数的に考えてみよう。片や、モードの言語原空間という集合があり、他方に、「流行性」や「魅力性」の種々の言辞が含まれている世界原空間という集合がある。前者の領域でモード陳述が形成されるが、その陳述のシニフィカシオン(意味創出)機能は、関数として、後者のリアル世界に、モード的に意義深い意味を写像的に創出するのである。この関数を記号Fのように、一般的に記号Mで表すことができるが、多くの場合、陳述が主にそれについて

言明するところの基体（ヒュポケイメノン）に当たるもの（パルトでは対象機能とされるもの）をその関数記号として選ぶと非常に都合がよい。例えば、陳述が「カーディガン」について、その襟の開閉をテーマにしているとすると、モード関数を表す記号は、「カーディガン」ないし省略形で「カ」とするのである。このような基体（パルトの対象）には、「スカート」「ブラウス」などの§4のA-2語群が最も多いだろうが、変異項に当たる語に基体的機能があれば可能ではある。もしそのような基体がなければMで代表させよう。さて、関数の変項の方は、概ねパルトの変異項と考えて良い。いや、個々の具体的な変異項というより、変異項のカテゴリーのようなものと考えるべきであろう。従って、先の $x_1, x_2, x_3 \dots$ は、「形態性」「長さ」等の概念枠に該当する（但し変異項「種の断定」の場合、その対象が陳述の基体であれば、関数記号を兼ねてカッコの外に置くことにしているので、関数の中に現れるのは、例えば基体の「ブラウス」の部分の「えり」の種類という仕方などでしかないだろう。この時「えり」は部分関数になりうる）。さて、変項の空白の枠には、変異項に属する具体的な語や言辞（§4のA-1）が代入される。これら具体的な変異語が、パルトの支持項に当たる変項の空枠の中に代入されることによって、その語の意味が枠を伝わって、陳述全体を支えている基体（＝関数記号）に浸透し、基体自身の意味と混じり合って意味統合体をつくるのである。そして、その意味統合体が、リアルな世界にそのモード効果を投掛け、世界に「流行性」「種々の魅力」といったモードの意味を創出する。それが関数の値rに当たるもので（以下モード値と呼ぼう）、§4のB-1, B-2語群が該当する。

いま、例えば「流行性」をam (à la modeの略)「非流行性」をdm (démodeの略)、「スポーティー」をs (sportの略) h (habilléの略)と仮に表すと、モード関数モデルの母型は次のようになる。

種の断定	透明度	長さ	大きさ	流行性・魅力性
↓	↓	↓	↓	↓
M ([],	[],	[

具体例として、§7の陳述①～⑦（和訳で）からいくつかを選びモード関数の形にしてみよう。

- ① 「襟の閉じたセーターはドレッシューです」：まず、この陳述の基体が「セーター」であるので関数記号としてカッコの外に出しその前に置く。次に、「襟」

は「閉じた襟」の基体であるが、全体としての基体「セーター」の部分であるので、カッコの中に変項の一つとして入れる。「閉じた」という変項は、「襟」という部分基体についての性質なので、「襟」で始まる関数のカッコの中に入る。しかし「襟」自身が「セーター」関数のカッコの中に入っているので、「閉じた」を有する「襟」関数も小カッコとして、「セーター」関数の大カッコの中に置かれる。そしてセーター関数の値は、「ドレッシュー」ということなので、以下のような形になる。

関数=類の断定	部分関数	開閉性	モード値
↓	↓	↓	↓
セーター（襟（閉じた））≡ドレッシュー			

- ② 「水平な襟開きのセーター」：

関数=類の断定	部分関数	位置	モード値
↓	↓	↓	↓
セーター（襟 開（水平））≡流行			

- ③ 「ゆったりしたブラウスはあなたのスカートにロマンチックな様子を与えるでしょう」

関数=類の断定	随伴関数	合い加減	モード値
↓	↓	↓	↓
スカート（ブラウス（ゆったり））≡ロマンチック			
或いは、2つの関数の和でも表現できる。			
スカート+ブラウス（ゆったり）≡ロマンチック			

- ⑤ 「今年のモードは青です」

関数=モード全般色	モード値
↓	↓
M（青）≡（今年の）モード	

- ⑥ 「スリット入りの本当の中国風チュニック」

関数=種の断定	存在の断定	人工性	エスニック	モード値
↓	↓	↓	↓	↓
チュニック（スリット、本当、中国風）≡モード				

- ⑦ 「赤と白の市松模様の木綿のドレス」

関数=類の断定	材料	模様・柄	色	モード値
↓	↓	↓	↓	↓
ドレス（木綿、市松模様（赤、白））≡モード				

§10 本稿冒頭のドイツ女性雑誌のモード陳述に対するシニフィカシオン関数分析

いよいよ、冒頭の‘freundin’誌の記事のモード関数的構造が確定できる。また、それを手がかりに、モードの陳述が読者をどこへ誘うのかの問いに答えるこ

とも可能となる。但し、用語分類法は、バルトに該当するものがない等の理由で若干異なる。

- ① 「ミント・ブルー、トルコ・グリーン、マリーン・ブルー：(それら) 夢のような美しい青や緑の色調は、雲一つない青空、無限に広い海を想起させる—それに休暇気分を惹起させる」

色 色 審美的性質 イメージ
↓ ↓ ↓ ↓

M (青&緑 (美しい (夢のよう))) =

色 色 色
↓ ↓ ↓

M (ミント・ブルー、トルコ・グリーン、マリーン・ブルー) ≡ 雲一つない青空、無限の海、休暇気分

モード値・イメージ

ブルー ≡ 雲一つない青空、無限の海、休暇気分

[ミニ解説：数多の色の中から、モード意義の点で他の色とは差異あり、として今夏選ばれたのが、「青」と「緑」色であるということである。しかもその青や緑も通常のものではなく「美しい」もの、しかも「夢のような」イメージを喚起する「青」と「緑」である。例えば、「ミント・ブルー」「トルコ・グリーン」「マリーン・ブルー」。雑誌のファッション・フォトに例示されているように、それらの色を有している服は、夏を象徴する「雲一つない青空」や「無限の(青い)海」など、青い背景に溶け込み、自然との一体を演出する。「夢のように美しい青や緑」の服を身につけた読者は、「夏休みの」無限に遠く、懐かしい「気分」に浸れるのである]

- ② 「大理石模様の網シャツの洗練された点は、長さ50cmの巻きカラー。それをカルメン・デコルテとして、片肩に魅力的にはおること出来る。光沢あるビキニトップはシャツを不透明にする」

関数=類の断定 色 種の断定 模様・柄 存在の断定
↓ ↓ ↓ ↓ ↓

シャツ ((青), 網タイプ, 大理石模様, カラー付き)

種の断定 長さ 種の断定 着方
↓ ↓ ↓ ↓

(巻きタイプ, 50cm, カルメン・デコルテ風 (片肩はおり))

+

関数=類の断定 色 種の断定 光沢性 位置
↓ ↓ ↓ ↓ ↓

+ トップ ((青), ビキニ風, 光沢, シャツ下,

透明度 ↓ ↓
モード値 ↓ ↓
不透明効果) ≡ 洗練, 流行

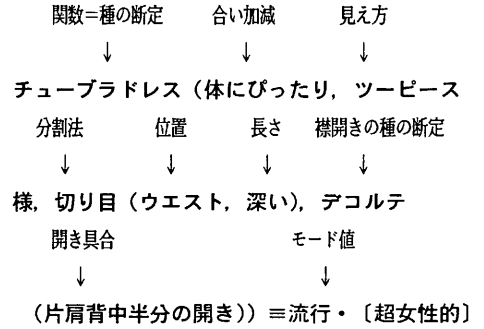
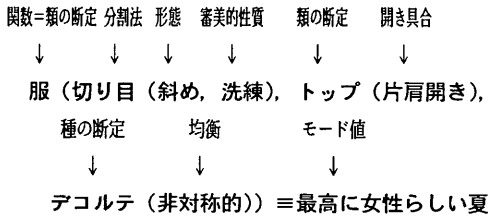
[ミニ解説：その陳述には「青」についての言及がどこにもないが、「青」が複数の記事全体のテーマであることは①からも明瞭なので、隠れた最も重要な変項として〔 〕に入れて含める。

この記事には続きがあり、「シャツは極薄のネット・ストレッチ・ジャージ製」とある。傍らのフォトを参照すると、モデルの着用しているシャツは全面マリーン・ブルーで、そこに海中の光の戯れに似た乳白の帯状の紋様がうっすらと入っている。大理石模様と呼ばれるものであろう。か細い青の紐で吊られているシャツには、同じ薄地のケーブ状のカラーが、片方の肩からふんわりと青く斜めに流れ、もう一方の露な肩の下方を優しく巻いて背中に回っている。このカラーが、他の部分では為し得ない「洗練さ」という意義を服全体に付与している。そのカラーも「青」で「カルメン・デコルテ風」で長さ「50cm」位でなければならない。そのどれかに他の選択肢が入れば同じような効果を与えられるかどうか(与えないというのがモード陳述の断定である)。細かく網状に青くおおっているシャツの背後の肌は、全体に暗く沈んでいる。そこで、シャツの下、胸の部分のビキニ風のトップが、内側からぼーと鈍い光沢を放つと、さながら深い海底の砂地のような印象を与える。しかし同時に、その光沢の下、胸の肌は「不透明」にされるのである。

マリーンブルー—色のこのシャツは、光と波が戯れる海そのものである。カリブ海のゆったりとしたうねりに似た青い「巻きカラー」が、その印象を「洗練された仕方で」強めているのである。つまり、他のシャツではなく、正に記述された通りの仕様のこのシャツを身につけることは、酷暑の最中に、自ら海になること(気分)である。記事は暗にそれを約束している。

以上、周到に計算されたファッション・フォトのイメージが醸し出す効果も一部取り入れて記述したが、フォト自身も、言葉とはことなるが独自のシニフィカシオン(意味創出)機能を有する「記号」である。しかし本稿ではもっぱら陳述の意味創出を中心に分析している]

③ 「洗練された斜めの切り目を持つ服、片肩の開いたトップ、非対称的なデコルテは、この夏が最高に女性らしくなる徴」



[ミニ解説：この陳述は、タイトル「目を惹く切れ目」に添えられている文章で、雑誌の、以下4ページに渡る4種の服の仕様が持つシニフィアンとシニフィエを総括的に明示している、と捉えることができる。具体的には、次の④の服が上のすべてを具備している。

最後の、シニフィエの部分に当たる「(これらの特徴がある服を着ると) この夏は最高に女性らしくなる (dieser Sommer wird superweiblich)」の、「最高の女性らしさ」とはどのような事態を指すのか？ それは、「切り目が斜めで、トップの片肩が開き、デコルテが非対称的な服」を着ている人、着ている状態を指す、という風に同語反復的に元へ戻されるのか。その通り。とはいっても内容が空疎であったり貧弱であったりすることはない。というのは、「切り目が斜め」という陳述一つとっても、「切り目が入らないよりは入っていること、その切り目は真っすぐ水平とか垂直ではなく、斜めであること」など、差異や抑圧の情報が含まれており、そこから、「女性的ではあるが、大したものでないモード」から「全く女性的でないモード」「モードとも言えない類」まで、選択されなかった種々の変項や対象やそれらの無数の組合せがそのジャンルに入ることが推察されるのである。それらと比較して、先の3つの特徴を持つ服装は、最上級的に「超女性的」なのである。このように、服装のシニフィアン (意味創出) における意味分節化は、シニフィエの分節の意味を創出する]

④ 「体にぴったりしたチューブラドレスは (ウエストに深い切り目が入っているため) 再度見なおすと初めてワンピースであることが分かる。片肩とデコルテの背中半分が開いており、腰のところで、肌の一部が覗いている」

[ミニ解説：チューブラドレスとは、管のようにぴったりと体を包むワンピースだが、この服の場合 (フォトを参照する限り)、ウエスト部分に、上は斜め、下は水平、全体として3角形状の大きな切れ目が入っており、その深い切れ目から肌もネイブルも露呈している。従って、一見、ツーピースに見えるわけである。また、通常のデコルテは両肩と背中が均等に開いているが、この服の場合は、片肩からもう一方の脇の下へ、流麗に斜めの線が流れ、他方の肩や腕が大胆に顕れている。背中も同様に、大きく斜めに開かれている。この服も、上からくるぶしまで、全体がマリーンブルー。陳述には、「超女性的」の語はないが、当然、隠れたモード値としてこの意味は自明であり、[] で表現する。

「超女性的」の内容はやはり、陳述=シニフィアンにおける意味分節化から読み取れる。

第一に、他のすべての「服の合い具合」に比して、「体にぴったりした」状態は、正にその服を身につけた人の「体のラインをそのまま強調する意味」を持つ。第二に、「チューブラ・ドレス (直訳=管状のドレス)」は、他の種類のドレスと比べ、「体の、特に、管のような曲線的ラインを強調する意味」を持つ。第三に、「一見ツーピースかと見まごうばかりのウエスト部における深い切れ目 (腰のところで肌の一部が覗いている)」は、「性差的に象徴的な三角形状の深い裂目を暗示的に意味」しているかに感じられ、第四に、「片肩とデコルテの背中半分が開いている」状態は「斜め下方に流れるにつれ、一方の肩と腕全体が大きく露出していく、片開きデコルテのそそるような動きを意味」し、最後に、「ウエストと背中半分の露な肌」は「体の前面と同様、ショッキングな三角形状の裂目と動き」を暗示しているのである。それらが統体として、しかも分節的に、シニフィエとしての「最高の女性性」の意味を創出している]

- ⑤ 「夏、遊び感覚で着る肩紐ワンピースで、肌の露出が可能。柔らかな素材やレースで出来ていれば、ロマンティックな2重生活を送れる」

関数=種の断定 ルック・スタイルの種の断定

↓

↓

肩紐ワンピース（[ランジェリー・ルック]、

着方心理 露出度 素材 触感

↓

↓

↓

↓

遊び感覚、肌露出多い、素材（柔らかか）、

布地の種の断定

モード値

↓

↓

レース）≡ロマンティックな2重生活

[ミニ解説：この文は明らかに、「ランジェリー・ルック」とタイトルされている雑誌記事の2ページ分を総括する意図で書かれている。従って、「ランジェリー・ルック」という変項を〔 〕内に追加する。この言葉からこの服がスリップのような「吊り紐」の下着様で、「肌の露出が多い」ことは自明となる。素材は当然「肌に柔らかい」もので、(フォト中のモデルのように)細かい花柄の赤いランジェリー風ワンピースなどの上に、繊細な花模様をあしらった手のこんだ刺繍「レース」の薄手のチュールなどを羽織ると、「遊び感覚」は最高潮になり、人は夢見のような物語の「ロマンティック」な気分にとっぷり浸ることになる。何の変哲もなかった日常の自分自身や世界に服を媒介として、非日常的で私密的な「2重生活」が忍び込む。

しかし、シニフィエとしての「2重生活」は服装全体の意義を解く重要なキーワードである。何故なら、モード陳述のシニフィカシン（意味創出機能）は、そのモードを所有し保持し身につけるすべての人に、それを媒介として、身につけない前の自己や世界とは異なる自己や世界を約束し、そこへ「誘う」からである。しかし自己は、それを身につけ装うことによって、完全に新たな自己に変貌しきることは出来ない。所有や「身につけた」状態を媒介とする「存在」には、ちょっとしたスキ間が常に残るからである。「所有媒介的存在」と「所有非媒介的存在」との間には越えることの出来ない裂目＝スキがついて回る。素敵モードで身を装い、新たな自己に変身しつつ、自己は、「1重的」には変身しえないこと、どうあっても「2重生活」にとどまることを自己意識している。それを「装いにおける亀裂（＝スキ）の宿命」と捉えるか、「生の健康な鏡像の戯れ（＝スキ）」と捉え

るか。どちらにせよ、服を着、装って、他者との生活世界に登場する時、人は自己の在り方にスキを生成し、またその「スキをついて」微分的に、新たな一なる自己や生活を執行しつつ創出しようとする。しかし、モードの記述が呪文のように確約しても、スキが遂に消え、自己が所有を介して一なる自己になり切ることはないのである。但し、自己が世界に根を降ろす方途は主に「所有」であるから、憑かれたように、家や食物や服や他の種々の装いを追求する人々がいても全然おかしくない。モードの陳述とは、そのような果てしない追求に対する、果てしない約束である。しかし、「かくかくしかじかの服を所有し保持し身につけることによって、あなたは絶対確実に望みの自己になる」と確約するより、「2重生活」への誘いの方が、正直な本音に近いだろう]

§ 11 モードのシニフィカシオン関数を媒介とする自己表現（自己創出）- 1

以上の考察から、モードの陳述が、様々な変項の観点から、或る特定の衣服（マリンブルーの網シャツとか、深い斜めの切れ目入りのチューブラドレス、ランジェリー・ルックの肩紐ワンピース等）を、他の衣服から際立たせ、それに特別な差別的価値や意味を創出し付与すること、またそのようなシニフィアンにおける意味創出が、非流行性を排して流行性を、世界の灰色に沈んだ数多の日常性に対して或る魅力的な出来事や性質を、シニフィエとして出現させることが明確になった。

しかし誰が、世界や人に魅力的変貌を齎らすモードのシニフィカシオンの恩恵に浴することになるのか。

モードの陳述を読みつつ、その陳述のシニフィカシオン（意味創出作用）のベクトルに沿って、「流行性」や「無限に青い空と海の休暇」「最高に女性的な夏」「ロマンティックな2重生活」といった、世界や人の特別なシニフィエへと「誘われている」のは、他ならぬ「読者」としての「自己」である。しかし、現実の「自己」はまだ恩恵に浴してはいない。OLとして規定のスーツを着、ビルの狭間から汚れた空を仰ぎ見るだけである。カリブの限りなく青い蒼穹の下、思い切り深呼吸したい。素敵なビーチホテルの爽風の向こう、眩いばかりの水平線を背景に、流麗な曲線のチューブラドレスで波打ち際を一人で歩きたい。しかし実際は願望とは程遠い。フォトの中のモデルのように、現に「流行」に身を置き、世界の変容を身をもって生きる為には、少なくとも一つの条

件を満たさなければならないのである。

その条件とは、モードの陳述が特色付けている当の衣服を、実際に「自己」の身へ引き付け身に着けることである（独語：anziehen）。それを身に着け保持し（anhaben）、それを現に着ている状態にある（tragen）ことである。この服の「着用」は、「所有」と「ハビトウス」の中間に当たる「付着」とでも呼べる状態であろう。

ところで「現に身に付着させる」為には、その衣服を「所有」しなくてはならない。「所有」するためには更に、「購買」しなくてはならない。このもっともな理由で、モード陳述にはモデルが身につけている衣服やバッグ、靴やアクセサリーのブランド名と定価が記されている。

これらの条件をクリアすれば、「自己」は、「自己」が密かに同一化を切望する美しいフォト・モデル（＝願望されている理想的自己）と同様、佇むだけで、自己の周囲に「流行性」を醸し出し世界を「最高に女性らしい夏」へと変容させることができる（とモード記事は確約する）。

衣服の「購入」「所有」「身に着用」を媒介とせねばならないが、ともかく衣服が身に「付着」している間は、「自己」は、「（審美的な）理想的自己」に再生するのであり、「（審美的な）理想的自己」なのである（存在）。或いは、より正確に言えば「（他者に対して、審美的に）理想的自己の見え方をしている（見え存在性）」のである。しかし、「所有」と「付着」、「付着」と「存在」、「存在」と「見え」のそれぞれは微妙に異なる。それらの間にはスキがある。「自己」と「見えの自己」の揺れ動くスキを楽しむ（スキを放ったり、スキを突いたり、スキを繕ったり、スキを増幅させたり、糊塗したり、等々）か、それとも差異を固定化し、「自己」が「見え」に金輪際隠れないよう抑圧し、ひた隠しにし、「見えの自己」のみを押し出すか。しかし、自分で「見えの自己」に満足するという気持ちのどこかに、他人にも自分の意識にも「見えない」よう、抑圧している「自己」との差異が、実は自己意識されている。スキは、多様な「自己性」の生成素の働きをしている（スキの詳細は、他の機会に譲る）。

以上の素描的考察から、自己表現（創出）が、モードのシニフィカシオン関数を媒介として機能しうるものが看取できる。それが如何に可能なのか、以下順を追って、より体系的に解説しよう。

§ 1 2 モードのシニフィカシオン関数を媒介とする自己表現（創出）－ 2

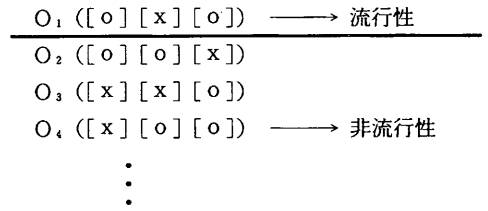
(1) シニフィカシオン関数機能の図解

いま、対象が1つで変項が3つしかない単純なモード母型を考えよう。対象として、ブラウスであろうが、ジーンズであろうが構わない。それを記号Oで表そう。変項も、「色」であろうが、「襟開き」であろうが、「縁」であろうが構わない。そして各々に、その種に当たるどんなものが入ろうと構わない。ここでは、単にその変項を何かが満たしている徴にOを、欠如の徴にXをつけよう。

さて、或るモード記事が特別推薦している服の母型が、O ([O], [X], [O]) であったとする。これが単純に、世界に「流行性」を惹起し、他の3項のすべての組合せ母型は、「非流行性」を意味するとしよう。

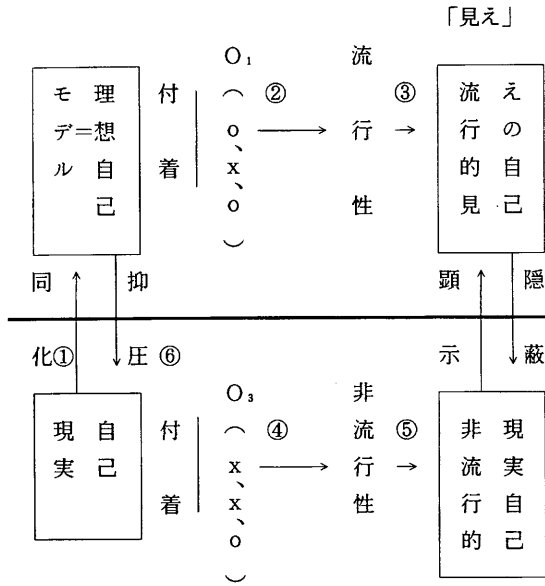
図解すると、次のようになる。

線分——は、上下を分かちモード意義的差異線である。



(2) ところで、——線の下方に現実の「自己」が位置するとしよう。上方は「モデル」が鎮座する領域である。「自己」は、自分の「理想的自己」としての「モデル」に同一化することを願望する。その必須条件は、O₁を「身につける」ことである。衣服の「付着」を媒介として、モードのシニフィカシオン・ベクトルに沿って「流行性」へと導かれる。自己表現の観点から、この「流行性」は「見えとしての自己の流行性」へと波及する。「非流行性」は「見えとしての自己の非流行性」となる。図解（次頁）すると次のようになろう。

[ミニ解説：次頁の図中の①はファッションフォトの中のモデルに自己同一化したい「自己」の願望を表す。モデルといっても、衣服O₁が付着している限りのモデルで、この衣服O₁のシニフィカシオンの意味差異化作用②のお陰で「自己」は、衣服の変項の分節化を「身に披り」、「流行性」を帯同することになり、「見え」の面では、「流行に合う自己」に変貌できるのである(③)。



現実の「自己」はどうかと言うと、O₁の購入も所有も、従って着用もまだであり、身につけるのは、O₁ではなく、せいぜいO₂である。しかしモード陳述の、「O₁→流行、それ以外は非流行」という差異化的断定によって、「自己」は「非流行」へ(④)、更に「非流行に沈潜した自己」(⑤)へと意味づけられる。

ところで、「自己」の「理想的自己」への同一化願望は、反面、現状の「自己」に対する抑圧願望(⑥)である。それは、出来るならばO₂以外は着用したくない願望であり、結局シニフィエ面においては、「非流行的な現実の自己」の隠蔽、「流行に適った華やかな自己」の前面顕示の願望である。

「自己」は、衣服O₁を身につけることによって、そしてそれを身につけている限り——の上に棲むことになる。有るがままの「自己」は審美的に圧死し——の下に葬られる。それが「自己」の審美的願望である為、その死は喜ばしいものである。しかし、「自己」は無化されない。何故なら、その喜びは、「自己」と「理想的自己」の差異＝スキの自己意識のただ中から生じてくるからである。しかも、必須条件である衣服の「付着」とは、「自己」への「付着」を意味するのであるから]

結 論

いまや、モード陳述が誰を、どこへ「誘う」かが明瞭である。

読者である「自己」を、モデルとの同一化や衣服の「着用」を介して、「流行性」や魅力的な「世界変貌」へと誘い、最終的には、モードのシニフィカシオンが創出する、「流行に適い、超女性的であったり、マニッシュであったりする審美的に理想的な自己」へ、誘うのである。「所有」や「付着」と言ったやっかいな条件があるにもかかわらず、多くの人がその誘惑に抗えないのは、そこに、モードの権威に基づく、(審美的な)「自己変貌」の確約がある、と見做すからであろう。

予 告

衣服のシニフィカシオンから、それを媒介とする自己性へと考察を進めたが、シニフィカシオン機能の研究を、「衣服」から更に「化粧」や「髪の手入れ」その他の種々の「装い」や「美容」、更には「表情」や「行為」「習慣」「生活態度」といった方向に普遍化することができるだろう。それにつれ、それらシニフィカシオン機能と自己形成との関わり、特に自-他関係性や隠れ裏構造がより精細に見えてくることだろう。

しかし紙幅の関係もあり、第Ⅱ部は稿を改めて論じることとする。

参考文献

1. Barthes, Roland, 1967, Systeme de la mode, Paris, Le Seuil
2. R・バルト著、佐藤信夫訳、『モードの体系』1972、みすず書房
3. F・ソシュール著、小林英夫訳、『一般言語学講義』1972、岩波書店
4. 丸山圭三郎著、『ソシュールの思想』1981、岩波書店